

水稻・大豆栽培情報 7月号

令和2年6月23日
J A 柳 川
南筑後普及指導センター

【水稻】

1 麦わらすき込みほ場の水管理

麦わらをすき込んだほ場では、ガスが発生し、稲の活着が悪くなることもあるため、水管理を徹底します。

田植え後、除草剤散布までの間は浅水とします。

除草剤散布後1週間は湛水し、その後は間断かん水（3～4日おきに湛水と落水を繰り返す）をして、ガス抜きを促進します。

2 雑草防除

田植え後の除草剤を使用しても、ヒエが残る場合は「クリンチャー1キロ粒剤」を、広葉雑草が残る場合は「バサグラン粒剤」を、両方残る場合は「ハイカット1キロ粒剤」、又は「クリンチャーバスME液剤」を下記の要領で散布します。

雑草の種類	使用する農薬	使用量 (10a当たり)	使用時期	収穫前日数
イネ科雑草	クリンチャー 1キロ粒剤	1kg (湛水散布)	移植後7日～ ノビエ4葉期	30日前まで
		1.5kg (湛水散布)	移植後25日～ ノビエ5葉期	30日前まで
広葉雑草	バサグラン粒剤	3～4kg (落水散布)	移植後15～55日	60日前まで
イネ科・ 広葉雑草	ハイカット 1キロ粒剤	1kg (湛水散布)	移植後15日～ ノビエ3.5葉期 (効果発現まで2～3週間要する)	60日前まで
	クリンチャー バスME液剤	1000ml (水70～100L) (落水散布)	移植後15日～ ノビエ5葉期	50日前まで

3 中干し

株当たりの茎数が20本程度になったら、中干しを行います。中干しは無効分げつの抑制や倒伏防止のため、必ず実施します。中干しの程度は、田面に小さな亀裂が入り、軽く足跡がつくくらいです。(田面が白く乾かないよう注意します)

近年は高温の影響で、水稻の初期生育が早まっており、中干しが遅れているほ場が多くみられます。

※実りつくしについては、田面が白乾しない範囲で“強めの中干し”を実施しましょう。

【大豆】

1 ほ場準備

- ・収量向上に向け、土壌 pH が 6.0～6.5 になるよう土壌改良資材を施用します。
(炭酸苦土石灰:160～200kg/10a、ミネラルG:160～200kg/10a)
- ・地力維持のため、麦わらは極力すき込みます。
- ・耕起後は速やかに播種を行います。耕起後降雨があると、ほ場が乾かず播種が遅れます。また、逆に晴天が続くと、過乾燥となり出芽不良となるため、注意します。

2 播種

播種期	7月5日～20日 (適期播)	7月21日～ (遅播)	※1株2粒播
株間	30～20cm	15～10cm	
10a 当り播種量	3～5kg	6～9kg	

播種深度は3cm程度の深さを基本とし、土壌の水分状態に応じて調整します。
晴天が続く場合はやや深め(5～6cm程度)とします。

3 雑草防除

使用時期	薬剤名	10a 当たり使用量	希釈水量
播種後 ～出芽前まで	ラクサー粒剤	4～6kg	—
	ラクサー乳剤	400～600ml	100L
	プロールプラス乳剤	400～600ml	100L

- ・雑草の発生が多いほ場では、播種前の雑草対策として、ラウンドアップマックスロード(200～500ml/100L/10a)、又はバスタ液剤(300～500ml/100L/10a)を散布します。
- ・除草剤散布時に覆土が不十分の場合、薬害で大豆の出芽が抑制されることがあります。また、砕土が不十分な場合やほ場が乾燥している場合、散布前後にまとまった降雨があった場合には、除草剤の効果が劣ることがあるため、注意します。

4 中耕・培土

本葉2～4枚の頃(播種15～25日後)までに、必ず1回は実施します。
雑草抑制効果が大きく、薬剤防除と合わせることで、さらに効果が高まります。
また、生育の促進や、排水性の向上、倒伏抑制に効果があります。

5 その他

除草剤を使用する時は、隣接するほ場に飛散しないよう十分に注意します。
強風時には散布を避け、ドリフト低減ノズル等により飛散防止に努めます。

農薬使用上の注意

- 1 散布前に必ず農薬ラベル(①適用作物、②使用量や希釈倍数、③使用時期や総使用回数、④有効期限)を確認!
- 2 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止対策を徹底!
- 3 散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄!